

研也(けんや)と初めて会ったのは中学の頃で、それからずっと、気づいたら隣にいる存在になっていた。「飯行くか」「部屋来い」と、誘い方はいつも一方的で、それでも連絡をくれるのは決まって研也の方だった。

今となっては当たり前になってしまっている。研也の部屋に上がることも、ふたりでだらだら過ごすことも、全部が日常の一部になっていた。

## 『今日、俺の部屋』

だから今日も、短いメッセージひとつで私は靴を履いていた。

研也のアパートに着くと、鍵は開いていた。いつものことだ。部屋に上がると台所から「適当に座ってろ」と声だけが飛んでくる。

「はい」

六畳ちょっとの部屋。使い込まれたローテーブル

とクッション。私は返事を返し、いつものクッションに座って壁に背を預ける。

(いい匂いする。今日はなんだろう……)

研也がお皿を二枚持って戻ってくる。無言で一枚を私の前に置いて、自分はその隣に座る。テレビがついて、他愛もない話をして、いつも通りの時間が流れていく。

それが居心地よくて、長年この関係が続いているんだと思う。だから、こんなふうに無防備でいられた。

食べ終えてテレビを眺めていた時、研也が言った。

「肩、かちかちだな」

「え、そう？」

「そうだろ」

短くそれだけ言って、もう私の後ろに回っていた。

「ほぐしてやる。力抜け」

大きな手が両肩に乗る。

「え、う、うん……」

（な、なんで急に……マッサージなんて言い出して……）

研也の親指の腹が肩甲骨のきわをゆっくり押す。力加減が絶妙で、凝り固まっていたところに指がはまる感覚がある。研也ってこんなに手が上手かったっけ、と戸惑いながら、マッサージに身を任せた。

（でも、なんかすごい丁寧っていうか……。気持ちいいは、気持ちいいけど……）

全部の動作がゆっくりで、確かめるようで、まるで壊れ物に触るみたいだった。

「ここも固い」

声のトーンは変わらない。でも指の向かう先が、肩から脇の下へ、そして前へと、ゆっくりずれていく。

「ちょ……研也、肩だけでいいって」

「肩は色々な場所と繋がっているからな」

「で、でも……」

「いいから」

有無を言わさない声だった。研也の指が、脇の下から前へと滑り込んできて、両手がTシャツの裾を掴んだ。

「え、ちょっ、ちょっと！」

あっという間に着ていたTシャツを脱がされ、ブラが晒される。反射的に両腕を胸の前でぎゅっと交差させた。

「ちょっと、なんで脱がすの！？」

「邪魔だから」

（なんで、そんな普通なの……！）

振り返ろうとしたら、肩を後ろから押さえられた。  
そのまま、背中に手が回って、ブラのホックに指が  
かかった。

「待って待って、それは——！」

カチャ。あっさりと、外れた。

ストラップが肩から滑り落ちて、研也の手がそれ  
を引き抜く。腕を交差させていたせいで止められな  
かった。気づいたときには、ブラが研也の手の中に  
あった。

「や、やだ！ 返して……！」

「後で」

顔に熱が集まってくる。シャツも脱がされて、ブ  
ラまで外され、研也の前でこんな格好になるなんて。

長年の友達の前で、ブラひとつ外されるだけでこんなに恥ずかしい。でも研也は涼しい顔で、それがまた余計に恥ずかしかった。

「力抜けって言っただろ」

「抜けるわけ……っ」

「腕、どけろ」

どけられるわけがなかった。両腕をさらにきつく胸に押し当てて、首を横に振る。

「……やだ」

研也は何も言わなかった。そのかわり、腕ごと後ろから包み込むように、大きな手が前に回ってきた。

（え——）

逃げる間もなく、腕の上から手のひらで押さえ込まれる。そのまま、じわじわと、腕を胸から引き剥

がしていく。

「ちょ、ちょっと……っ、やだ……！」

腕が、外された。

(あ……)

胸が、露わになる。研也の手のひらが、そのまま静かにおっぱいの上に乗った。

「んっ……ッ」

乳房の頂点に指の腹がふれた瞬間、背筋がぴりっと震えた。

「あっ……♡」

研也の指がそこで止まる。そしてくる♡くる♡と、小さな円を描き始める。